

『天台菩薩戒真俗一貫鈔』について

窪 田 哲 正

一

叡山文庫、真如藏中に藏せられる『天台菩薩戒真俗一貫鈔』（以下「一貫鈔」と略す）は、「弘安七年五月廿三日於黒谷慈眼坊書之」の奥書をもつ撰者不明の一卷の書である。この書は從來学界でもあまりとりあげられなかつた文献であるが、しかしその内容はまことに注目されるものがある。この書は元寇直後の人心動揺する社会状況の中で、最澄の建立した大乘菩薩戒の「真俗一貫」の理念を敷衍して、「国王」の政道の真意義が「菩薩」の戒行実践の理念と合致することを説き、鎮護国家のためには叡山円頓戒の復興が急務なること、またその「大戒功力」こそが異国降伏の基となるものであることを力説したものである。そしてそのための現実的施策として、叡山黒谷の大乗戒場再興をうったえたものである。いふなればそれは、円頓戒を軸とした王法仏法相即論であり、この主題自体興味深いものであるが、さらにこの書は次に述べる幾つかの点において、日本中世仏教史研究上の重要な資料

を提供するものであるといえる。

すなわちこの書は、(一)鎌倉中期の黒谷流の教学、及びその教団的立場を示すこと、(二)檀那流の鎌倉初期における流伝の実態を記すこと、(三)当時の叡山をはじめとする有力寺社の衆徒、僧兵騷擾の根本原因として、教団経済体制のもつ矛盾を指摘していること、(四)南都戒学復興に関連して從來の諸資料中には見られなかつた貞慶の戒学発心の動機を記すこと等々である。

これらの中今回は、現在学者間に見解の相違があり、現今の学界に於ても争点のひとつとなつている。(一)と(二)の点について考察を加えてみたい。

二

いわゆる黒谷流の教学、教団的位置づけ等については学者間に異論がある。恵谷隆戒氏は恵尋、恵顥、興円、円観と相承していく黒谷の系譜を、「天台宗の直系である恵心、檀那両流の人々」とは別の「法然の門流」であると位置づけ、こ

の一派の人々によつて戒法復興運動がなされたことの理由を、ひとつには惠檀兩流が戒に重きをおいたのに対し、黒谷流は事戒を重視した、ふたつには法然の念仏教団を破戒無慚の徒であるとする旧仏教徒側の攻撃に対し「信空、湛空、惠尋の系統こそ戒法の正系であることを標榜して、誹謗を弁護せんがための手段として」この運動が展開されるに至つたのではないかと述べられた。

これに対し石田瑞磨氏は「この復興は源空の門流のそれであると捉えるならばそれは問題の焦点を見失うものである」と述べて惠谷説を批判し、黒谷一門の戒法復興をあくまでも天台宗の枠内の、天台僧による祖山の円戒復興の動きとして理解すべきことを主張された。このように学者間に見解の相違があるのは、惠尋、惠顥、興円らが専修念仏を如何に受容していたかを示す資料がほとんど無いことがその根本原因である。惠尋には『円頓戒聞書』が現存しそこには浄土教についての言及も一、二みられるのではあるが、しかしこれだけでは専修念仏との関係はあまり明らかではない。

その資料的空白を埋めるのが、『一貫鈔』の記事である。ここにはよく黒谷流と専修念仏の関係が示されている。結論的にいうならば、黒谷流の立場は、天台の綱格を守りつつもその中に専修念仏をも包摂しようとするものであるといえよう。

『天台菩薩戒真俗一貫鈔』について（窪田）

例えばこの書では浄土三部経を「方等部」とであると位置づけるのであるが、それは爾前教としての否定的意味で語られているのではなく、『法華玄義釈籤』の「雇作已前是施權、休業已後は顯実」の文によつて、肯定的に「顯実」の意義をもつものとして、すなわち法華と同様の「皆成仏道」の説として、それが語られているのである。

そして『一貫鈔』はさらに専修念仏の法門が、一心三觀、円頓戒と同じく法華本門の意義をもつものであることを説く。すなわち一心三觀は本門の意では不斷三惑の「断証一時觀法」であるが、円頓戒も「果地徳法門」である。これらと同様「阿弥陀三字即仏脉」であるが故に「円頓戒、一心三觀、三字名号、聊雖有_レ不同_一々脉異名也」と論ずるのである。いうまでもなくこれらの「断証一時」、「果地徳」、「仏脉」等の語はみな本門本覚の意味において語られているのである。そしてこのような観点から円頓戒と専修念仏が次のように会通される。

依_一一向大乘寺之義、立_一一向専修之名、他力本願文即得往生等義、源出_レ自_レ戒法之奥旨。不_レ領_レ比等之義、以_レ爾前迹門意、存_一自業自得之道理、人多難_レ他力。是則円戒絶_レ世之間、無_レ会通之人_一歟。然者不_レ知_一一向大乘寺_一者、一向専修之義難_レ成、不_レ學_一戒法、即身成仏_一者、証得往生、日難_レ立_レ者哉。念仏法門、雖_レ淺近、即身成仏之文隨_一一也。

ここには黒谷流の戒淨双修の立場が端的に示されているのであるが、その戒と淨とを結びつけるものが、さきにみたように本門本覚思想であつたという点が注目されねばならない。後述するようにこの書は檀那流をすこぶる賞揚するのであり、撰者もこの系譜に立つ人と考えられ、ここで示された本門本覚思想は檀那流のそれであると考えられるのであり、故に黒谷流の戒淨双修思想は檀那流の本門教学に基づくものであるということができよう。このように考える時、黒谷流を必らずしも恵谷氏のいわれる意味での「法然の門流」であるということではできないのではないかと考えるのである。黒谷一門に強い天台正統の意識があつたことは教學的側面からだけではなく、彼等が目指していたことが「皇帝本命道場」たる一向大乘寺の再確立にあつたことから認められるのであつて、教团的にみても黒谷の門流は天台教団の中に位置づけべきだと考える。

三

次に第二の問題にうつりたい。今ふれたように『一貫鈔』は檀那流を賞揚するのであるが、その記述は恵檀両流に関する研究に大きな一石を投ずるものであると考える。それは次の如き内容である。

恵光院者且那嫡流、碩学繼踵不絶之聖跡也。□実豪僧正雖為密宗人、伝紅葉手箱、帶血脈之間、門弟公性僧正且那八代

之碩徳也。此正教者天台奥蔵山王重宝、南岳天台之遠寿、伝教慈覚之心符也。尤可被賞翫之流哉。

ここには恵光院が「且那嫡流」であること、実豪が「紅葉手箱」と「血脈」とを伝え、またその門弟公性が「且那八代之碩徳」であつて、その所伝の教は「天台奥蔵、山王重宝」であると述べるのである。この記事のもつ意味について考えてみよう。

いわゆる中古天台の恵心、檀那両流の成立と展開をめぐる諸問題については現在も学者間に色々と見解の相違がある。そも／＼両流の確立・分派の時期すら平安末から鎌倉末まで諸説あいわかれてゐる。中でも檀那流についてはことにその流伝の実態が明らかではない。たとえば檀那流独自の『紅葉抄』と總称される文献についても、その流伝が確認されるのは『溪嵐拾葉集』が最初であるとされ、これらの文献の成立は鎌倉末以降とするのが、現今学界の有力説である。

しかし今みたように今みたようにこの『一貫鈔』の記事によつて、当時既に檀那流が確立、分派してゐたことが知られ、また実豪が「紅葉手箱」を伝えたと記することによつて、実豪の頃には『紅葉抄』の少なくともその原初的文献が存在していたことも確認されるのである。実豪の生没年は不詳であるが、その弟子公性は承久二年（一二二〇年）に山門の探題となつた人であるから、少くともこの年以前に、すなわち鎌

倉初期において「紅葉手箱」と「血脈」とを相伝する檀那流の流伝の事実があつたことを知る事ができるわけである。

従来、両流流伝の事実を伝える文献の中、鎌倉中期頃までさかのぼるものとしては、二編の日蓮遺文と幸円の『弾偽褒真鈔』との三点しか知られていなかったたのであり、しかもこれらの書の記述も決して詳しいものではない。その意味でこの『一貫鈔』の記事は非常に貴重なものといえるのである。またこのことによつて本書の撰者が公性に近い檀那流の人であると推測できるのである。

四

そこで最後にその撰者の問題について考えてみたい。『一貫鈔』の撰者について考察を加えた論考は、私見の及ぶ限りでは『天台真盛宗・宗学汎論』^⑧しかない。しかしそこではこの書を惟賢（一二八四、一説一二八八—一三七八）の著作としながら、一方では「思想的には叡空か惠尋あたりが作者ではないか」とも述べており論旨が明瞭ではない。

私はこの書は惠尋の撰述であると推定する。その理由は弘安七年の黒谷と、円頓戒と専修念仏として檀那流とを結ぶ線上にある人物は惠尋しか考えられないからである。惠尋（弘安九年・一二八六頃没）は、二尊院湛空の教示によつて黒谷戒場再興を企てた人であり、また彼が檀那流を稟けた人であることは例えば『惠鎮筆三句相承譜』、『天台宗相承一心三

観血脈』^⑩、『日本大師先徳明匠記』^⑪等から明らかである。しかも彼は公性の孫弟子である。撰者を叡空（一二七九没）とすることは内容から考えられず、また惟賢とすることは年代的に無理である。『一貫鈔』の撰者を惠尋とした場合、彼がこの書を撰述するに至つた背景について言及せねばならぬこともまだあるが、それは別の機会に譲りたい。

- 1 恵谷隆戒『叡山戒法復興運動の諸問題』印仏研九—一。
- 2 石田瑞磨『日本仏教における戒律の研究』四七〇頁。
- 3 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』六四九頁。拙稿『求道惠尋の『円頓戒聞書』について』印仏研二八—一参照。
- 4 裕慈弘『日本仏教の開展とその基調』一〇〇頁。
- 5 岩波日本思想大系『天台本覚論』五三九頁。
- 6 『探題次第』続群書本四五一頁。
- 7 裕氏前掲書二三頁。これらの日蓮遺文については一部に真偽論もある。
- 8 同書二八〇頁及び二九二頁。石田氏前掲書五五九頁参照。
- 9 宝戒寺文書『鎌倉市史』資料編一・三〇八頁。
- 10 『信仰叢書』所収『玄旨壇秘鈔』一九頁。
- 11 仏全一一・八八四頁。
- 12 例えば法然にはじまる「一向専修」を論ずること、貞慶以後の南都戒再興の事情を記すこと、また蒙古来牒（一二六八）以来の異国降伏をひとつの主題とすること等もその理由である。

（早稲田大学大学院）